

望岳山荘

いて

今年ももう師走に入
ったが、この夏以来私
は、松本にゆかりの亡
き女流俳人・杉田久女
のことを、仕事の合い
間にずいぶんと学ん
だ。そのきっかけを与
えて下さったのは、深
志高校時代の恩師で私
の父の俳友でもあった
藤岡筑邨先生である。

講演に藤岡先生をお招
きし、「俳句うらおも
て」と題して話してい
ただいた。先生のお話
は、国民総俳句時代と
も言われる今日の俳句
隆盛の諸断面を、俳人
とその句で逐一説明さ
れながら、いわゆる俳
壇が文壇や政界に劣ら
ぬ類廃に陥っているこ
とを述べられた大変興味
深いものであった。筑
邨先生は、私が最近、
亡き父の句集(『晴陽
句集-人と作品』)を
編んだことにも触れて
下さったが、現在は俳
壇でも女性上位とのお
話の中で、桂信子や岡
本眸、さらには亡き中
村汀女や星野立子に話
が及んだとき、「では

君たち、杉田久女を知
っているかね？」と質問
された。一同声なく、
私自身、深志高校時代
の国語の時間の生徒に
一瞬戻ったかのような
感に陥った。
だが実は、「花衣ぬ
ぐや纏る紐いろいろ」

杉田久女を知って

といいた艶美な句か
ら、「紫陽花に秋冷い
たる信濃かな」という
自然への静観、そして
「虚子嫌ひかな女嫌ひ
の単帯」と詠んだ彼女
の強い個性そのままの
句まで、感性豊かな彼
女の存在とその孤独の
境涯については、すで
に多くのことが語られ
ている。最近では「杉
田久女と橋本多佳子」
(牧羊社)も出ている
が、なんといっても庄
巻は、女流文学賞を受
けた田辺聖子氏の小説
『花衣ぬぐやまつわる
…』(上・下)(集英社

した墓が松本市宮渕の
丸ノ内中学校東側の墓
地にある。松本の土族
だった実父の赤堀廉三
夫妻の墓所に、久女が
あれほど角逐した師・
虚子の隣で「久女之
墓」とあるが、その墓
碑は田辺氏が小説に記
している久女の夫・宇
内の実家、愛知県西加
茂郡小原村のものとは
少し違っていて、「無
憂院釋妙恒久炊大姉
昭和二十一年一月二十
一日 俗名 杉田久
子」となっていた。

「炊」は「のぞむ」よ
ろこぶ」の意味だが、
「無憂院」は「無憂華
の木陰はいづこ仏生
会」と詠んだ久女の句
からとったものだろう
か。釈尊降誕にちなん
だ赤い花弁の無憂華
は、久女の生涯とは対
照的に、恋する乙女の
願いをかなえ、結婚の
幸せにかかわる花とし
てインドでは知られて
いるという。
私は、「久女之墓」
を訪れた秋雨あがり
の午後、たまたまわが
望岳山荘の裏に今年は
とくに群生した野菊を
そこに供え、父の句集
をそとと墓石に載せて
線香を焚いた。心充た
された秋のひとときで
あった。
墓の前の土に折りさ
す野菊かな 久女
(中嶋 嶺雄・東京外
国語大学教授)